タイトルは「死体を食らう生き物」。屠殺場を思わせる姿の〝肉でできた牛〟が天井から鎖で吊るされ、床には精肉トレーが散乱している。

Route 246 vol.1

MEAT MEET ART
―死体を買うこと／死体を食べること

あなたはお肉が好きですか？ スーパーに並ぶ精肉を見て何を連想しますか？ すき焼き？ 牛丼？ ハンバーグ？

実は私はお肉を一切食べません。いわゆるベジタリアンというやつです。

きっかけは「屠畜」に関する仕事について調べているときでした。ネット上の動画で「病気の牛が巨大なシュレッダー機に生きたまま投げ込まれ、雄叫びをあげながら徐々にミンチにされてしまう」という過激な一部始終を観たのです*。おそらくそのミンチはまた牛の餌になるのでしょう。そして多くの映像・書籍を見ていくうち、自分が好き好んで食べていた「肉」とは「動物の死体」であるという事実に気付かされたのです。

私は現代美術家として活動しています。表現媒体は絵画や立体作品が主となります。2009年2月に上野で行われた展覧会で展示した作品は、スーパーの肉を素材に使って牛のかたちを復元するというものです。実際に様々な部位の精肉を大量に買い集めました。小さな死体片から死体の姿を修復しているともいえるでしょうか。

私が肉を摂取しないのは、一種の不買運動ともいえます。しかし、この作品では大量に消費活動を行ったのです。賛否両論あるかもしれません。けれどこれはお金を出しさえすれば、他人に殺させた動物の死体を気軽に買えるということへの批評的表れでもあるのです。

「いただきます」という感謝の言葉があります。そのように言いさえすれば、人はどんな動物でも殺して食べる権利を持っているのでしょうか？ 私は今でも判らず日々悩んでいます。

＊ この動画は「病気になった牛」を牛のえさとして丸ごと処理する現場を映したものである。なお、BSEが社会問題化した後は、病気の牛のミンチを健康な牛に食べさせることはほとんどないと言われている。

渡辺 篤（わたなべ・あつし）／1978年生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修了。自身の体験をベースとしながら、社会批評的な作品を多数発表。代表的な作品に「池田大作氏の巨大肖像画」、日銀で展示した「延べ棒型鼻くそ」など。

246表現者会議　http://kaigi246.exblog.jp/